

## あかあかと一本の道…

### 酒井一先生を悼む

井上宏

「あかあかと一本の道とほりたり たまきはる我が命なりけり」

今年正月、大塩事件研究会会長・三重大学名誉教授の酒井一先生から賀状を頂いた。新年の賀詞とともに、冒頭の斎藤茂吉の歌が印刷されていた。さらに「いつも何かとご協力いただき感謝いたしております」とご自筆で添え書きされてあった。私は、日頃の事務局へのささやかな手助けに目を留めて頂いた先生の優しい心遣いが嬉しかったが、茂吉の歌に、先生の志を見た気がして心打たれた。

歌集「あらたま」所載のこの歌は、大正二年、師である伊藤左千夫の死に際し、二三歳の青年茂吉が、歌の道こそ自分が歩むべき一本道であり、我が命であるとの決意を歌ったものだ。一昨年病を得られ、幸い元氣になられた先生が、今後も歴史研究、中でも大塩の乱研究に邁進される決意を、この歌に託さ

れたと私は受け取って心強かった。

ところが、正月気分も醒めやらぬ一日、事務局の内田さんから、先生が九日に急逝され、今日ご家族のみで葬儀も済まされたとの報を受けた。昨年未一二月二〇日の忘年会では、あんなにお元氣だったのにと驚愕した。信じられなかった。

先生は大塩平八郎の乱研究で第一人者であるばかりでなく、「歩く国史大事典」と学生が呼ぶように、歴史全般に造詣が深かったが、歴史を学ぶのは未来に活かすためであるというのが持論だった。先生の講義は脱線が魅力で誠に愉快、且つ示唆に富み、聴く者を飽きさせなかった。多大な業績を上げられ、教え子も多数に上っているが、七九歳のこの高齢でも、なお情熱的に研究や講義を進められていた。賀状に今後への決意も表しておられたのに、さぞやご無念であつたに違いない。我々も本当に惜しい人を亡くして残念でならない。

信じ難いが、やはり現実を受留めねばならない。しかし、先生の肉体は滅びても先生の志は滅びない。その証がある。

今年二月一五日、私が住む堺市の泉北ニュータウンにある喫茶店「結」で、郷土史家・松本多加三氏

の講演があつた。演題は「大塩平八郎と江戸時代」。氏は堺泉州では有名な人だが、大塩事件研究会の会員ではない。非会員の方がこのようなテーマで講演されたのだ。私も定員オーバーのところを無理に頼み込んで受講させてもらったが、一〇〇人以上が実に熱心に受講していた。氏は毀誉褒貶様々な大塩評を客観的に紹介しておられたが、結論としては大塩の乱を次の時代を準備したものととして積極的に評価された。そして、氏が結びとして引用されたのが、実に酒井先生の言葉だった。一月九日に亡くなられた酒井先生の言葉が、二月一五日、ここ堺の地で、かくも多くの人に届けられた。このことに私は感動した。

私は無神論者であり、死後の靈魂は信じない。しかし、先生の教えや志は、遺された文字、教えを受けた人たちを通じて、今後も確実に後世に影響を与えていくことを信じる。

その意味で、先生は、あかあかと照らされた一本の道を、これからも歩き続けられるのだ。